

AMDA

ボスニアの医師招待

若手 4人 内戦の地に医の連帯

内戦後の混乱が続くボスニア・ヘルツェゴビナで医療援助活動を展開している国際医療援助団体、AMDA（アジア医師連絡協議会、本部・岡山市）は援助の一環として、現地の若手医師4人を日本に招く。3年半にわたった内戦で世界の医学界との交流や最新の医療

機器、医学書などの流入も途絶え、高度医療に立ち遅れた現地の医師が1カ月から2カ月、国内の大学や病院に滞在、医療技術を学ぶ。戦災被災地の医師を招くのは国内のNGO（非政府組織）では初の試み。近藤祐次事務局長は「与えるだけの援助から一歩踏み出した

かった。発想の転換だ。ニースはあると話している。来日するのは、外科、循環器内科、泌尿器科、精神科の20代、30代の医師4人。11月半ばに来日し、琉球大や沖縄県立病院、信州大、北海道旭川市の旭川厚生病院などで、日本人医師の指導や医療機器の研修な

どを受ける。渡航・滞在費はAMDAのほか各地の市民グループが負担。現在、ホームステイ先を募っている。AMDAは今年6月、現地に医療チームを派遣。ゴラジウデの戦争病院などで医療援助にあたっている。現地は、3年半で死者20万、難民・避難民280万人を出した内戦が昨年12月に終息。今月14日に統一選挙が実施されたが、民族対立の根は深く、依然混乱が続いている。

AMDAは今年6月、現地に医療チームを派遣。ゴラジウデの戦争病院などで医療援助にあたっている。現地は、3年半で死者20万、難民・避難民280万人を出した内戦が昨年12月に終息。今月14日に統一選挙が実施されたが、民族対立の根は深く、依然混乱が続いている。